《論　文》

感情コミュニケーションの社会学と現代社会(4)

内　田　　司

要　旨

現代社会における私たちの生活様式の諸特質の一つは，理性と感情が対立させられ，理性だけが重視され，感情（生活）の重要性が等閑視されてきたということである。というのも，私たちが生活している現代の市場経済社会では，私たちは，最小費用による最大の利潤追求，そのことを可能にする最適化と効率化，そして計算可能性という，近代合理性の経済化された生活原理が至上原理となった社会生活に，否応なしに適応しなければならなかったからである。こうした市場経済社会における経済様式化された社会生活の中では，私たちは否応なく自分以外の外的世界と，自己の私的（経済的）利益を実現するために，損得感情（勘定）にもとづいて，手段的・道具的にかかわらざるをえない。その中では，理性＝知性とされ，私的目的実現の手段として重視されるが，感情はそうした合理的な活動を攪乱する非合理的なやっかいものとして従属的な地位に押し込められてきた。しかし，こうした感情生活を抑圧する社会生活は，諸個人の精神生活だけでなく，対人関係，対社会的関係行為にもさまざまな問題を引き起こしている。連載からなる本稿は，かかる現代社会における諸個人の感情生活の非合理的な存在様式によって引き起こされている，諸個人の精神生活，人間関係，社会との関係にかかわる諸問題を，感情コミュニケーションの視点から分析することを目的としている。本稿の課題は，私たちの日常生活における社会的相互行為のあり方に影響を与えている，現代社会の社会形成原理・生活原理の下で展開されている，人々の感情コミュニケーションの基礎的な型の一つである傲慢とルサンチマンのコミュニケーションについて検討することである。

キーワード：感情コミュニケーション，共感，損得感情（勘定），疑心暗鬼のコミュニケーション，傲慢とルサンチマン，愛

目　次

序　問題の所在
第一章　社会・生産と生活の社会的諸組織・人間関係・諸個人の精神生活と行動・行為
第二章　理性と感情に関する理論（79号）
第三章　感情コミュニケーションの理論（80号）
第四章　現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型（81号・本号）
第五章　現代社会の社会変動と社会関係の変容，諸個人の精神生活の諸問題
　第１節　現代社会における社会変動と社会類型
　第２節　現代社会における生活諸領域の分節化と生活諸領域間の関係様式
　第３節　現代社会における消費の場における生活・社会関係・個人の精神生活

第４節　現代社会における労働の場における生活・社会関係・個人の精神生活
第５節　現代社会における教育の場における生活・社会関係・個人の精神生活
第６節　現代社会における家庭という場における生活・社会関係・個人の精神生活
結語　「共感」に基礎をおいた感情コミュニケーションが豊かに発展する社会のあり方を求めて

第四章　現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型

（傲慢とルサンチマンの感情コミュニケーション）

次に，傲慢とルサンチマンという感情コミュニケーションとはどのようなコミュニケーションかということについて検討して行こう。個性を単に「個体間の差異」というように理解する(1)とするならば，人間の個々人は，他の動物種とも比べても，ひとりひとり極めて個性的な存在であろう。肉体的・健康的にも，強い人もいれば弱い人もいる。大きい人も小さい人もいる。個々人が発揮する知性や諸能力にも，多様性と違いが存在する。好みや関心，そして価値観にも多様性と違いが存在する。経済生活の水準，または程度にも大きな違いが存在している。社会的，または政治上の地位や振るえる権力の大きさにも大きな違いが存在していよう。また，人間は，自由意志と目的意識を有している存在である。このことは，他者との関係において，自己の目的を実現するために，他者に対する支配・コントロールを行おうとする存在であることを意味している。ヘーゲル氏は，そのことを，産業の場合を例にとり，次のように述べていた。氏いわく，「産業においては人間それ自身が目的であって，人間は自然を自分の従者として取扱い，自然に人間の活動性の刻印を押す」(2)のであると。産業の例では，人間と自然との関係であるが，人間諸個人間の関係にその原理を適用するならば，人間個人は，他者との関係において自己の目的を実現するということそれ自身が目的である場合，可能ならば，「他者を自分の従者として取扱い，他者の意志・意思と行動を支配し，コントロールすることで，他者に対して自分の活動性の刻印を押そうとする」存在なのであると，言い換えることができるであろう。さらに，市場経済社会では，諸個人とは，原理的には，自己の利益の極大化のために行為している利己的な存在であり，しかも，その自己の利益追求の行為を他者との激しい競争の中で遂行しなければならないのである。これらのような特質を有している人間諸個人は，近代社会（市場経済社会）形成の理念であった平等で，博愛的な社会を形成することができるものなのであろうか。また，そうした社会形成のために，個々人の精神生活において必要不可欠な感情生活（後に検討することになる）として多くの論者たちによって論じられてきた感情生活は，果たして一般的・普遍的，すなわち全ての諸個人に強く共有化されたものになるのであろうか。

市場経済社会における私たちの経済生活についてこの点を見てみるならば，ヘーゲル氏によ

れば，人間諸個人は，社会的・歴史的・経済的・政治的・文化的諸属性を剥ぎ取った自然的存在としてだけ見たときでさえ，決して等質的な存在，すなわち平等的な存在でなく，すぐれて不平等的な存在であるがゆえに，市場経済社会における生活原理である競争（機会）の平等ということすら不可能であり，ましてや経済生活の平等を実現することは全く不可能なことなのであった。さらに，ヘーゲル氏によれば，市場経済社会の中では，その社会の形成原理から言って，そうした事態を超えて，経済生活の実現そのものが破綻するような人々が数多く生み出されざるをえないと見ていた。

そのヘーゲル氏のことばに耳を傾けてみると，市場経済社会では，「個々人それぞれの生計と福祉（経済生活の確実な実現）は一つの可能性として存在するだけで，その現実性は，個々人の恣意と自然的特殊性（自然的不等質・不平等）によって制約されていると同様，欲求の客観的体系によっても制約されている」(3)〔（　）内は引用者による，以下断りのないかぎり，（　）や傍点による強調は原文のまま〕のであった。しかも，「この可能性が，技能，健康，資本などの諸条件を前提とするものであればあるほど，ますますそうなので」(4)あった。そもそも，論理的に言って，市場経済社会の競争主義的条件の下では，必ず，諸個人は，勝者と敗者とに分かれざるをえない。しかも，それは単なる遊技場のゲームにおける勝敗とは違って，市場経済社会の中では，敗者は生活の破綻者となることを意味するであろう。先の引用文でヘーゲル氏も指摘しているように，人間諸個人は，あらゆる意味で等質的・平等的存在ではなく，すべての個人は，他者とは異なった自然的・社会的・経済的・政治的・文化的・主観的特性を有している個性的存在である。そうした諸個人間には，平等な競争は存在しない。肉体的に強い者もいれば，弱い者もいる。アイデアに富んだ者もいれば，貧しい者もいる。しかも，本人の責任に帰することのできない原因による病気や事故によって働けなくなるかもしれない。さらに，競争が不平等になるより大きな諸要因としては，どのような家族のもとに生まれたかという偶然的要因がある。すなわち，歴史的に蓄積されてきた経済的・社会的・政治的・文化的・精神的「資産」の違いが，生まれ育つ家族という要因の中には伏在しているのである。

これらの諸条件により，同じくヘーゲル氏によれば，市場経済社会の下では，諸個人は，富者と貧者に階級分化していくことが不可避なのであり，そして貧者には生活の確実な実現が苦しくなるという貧困問題が蓄積することは避けられないものなのであった。ヘーゲル氏に従って言えば，確かに，市場経済社会では，社会全体としては経済的富が蓄積され，豊かになっていくのであるが，とくに生計を獲得する手段として自己の肉体的勤労しかない労働者階級の間で，人々は経済生活上で窮乏化し，貧困が蓄積されていくのである。ヘーゲル氏いわく，市場経済社会は，一方では富の蓄積が進むが，「他面では，特殊的労働の個別化と融通のきかなさとが増大するとともに，この労働に縛りつけられた階級の隷属と窮乏とが増大し，これと関連してこの階級は，その他もろもろの能力，とくに市民社会の精神的な便益を，感受し享受する能力を失う」(5)という社会問題を内包せざるをえないのであると。

このように人間存在とは，その諸個人間の関係を見れば，不等質で，不平等的な諸関係の存在なのであり，しかも，市場経済社会の中では，平等という近代社会形成の理念に照らし，諸個人間の政治生活上の「抽象的な（法の上での）」諸権利については平等的であると例え言われていたとしても，市場経済社会の中では，人々は，さまざまな諸関係上の違いが経済生活上の決定的な違いに帰結するという社会形成諸原理の下で生活せざるをえないのであるが，そうした中でも，同じ人間存在として対等的な意識をもち，他者の人格，意志・意思や価値観などを尊重し，他者が人間としての尊厳を保てるような生活をおくることができるよう，お互いに配慮し，気づかい合うというような意識，感情の相互交流（コミュニケーション）をもつことができるものなのであろうか。市場経済社会の黎明期に，自由・平等・博愛という諸理念に従った，それゆえ平和な社会建設を構想した社会理論家たちが，そうした社会を実現するための，感情コミュニケーション上の条件として最も重視した条件こそ，人々の間における対等平等的な意識と感情のコミュニケーションだったのである。また，その正反対の感情コミュニケーションこそが，傲慢とルサンチマンの感情コミュニケーションだったのである。

かかる感情交流，すなわち感情コミュニケーションのあり方を社会秩序と平和の維持にとって極めて重要なものとして論じていたのが，デカルト氏であった。デカルト氏は，『情念論』の中で，「特殊情念」の重要なひとつとして，人が自分自身を「尊重」し，または「軽視」することに関する諸情念について，感情コミュニケーションの社会学にとっても重要な議論を展開していた。では，人がもつ，自分自身を「尊重」する，または「軽視」するという情念とはどのようなものなのであろうか。デカルト氏によれば，それら二つの情念は，驚きという情念の二つの種類にほかならず，「尊重は『愛』により，軽視は『憎み』によってわれわれのうちにひき起こされることがたびたびあるけれども，これはいつもそうだとはいえない」(6) ものでもあるような情念である。さらに，これら「『尊重』と『軽視』との二つの情念は，あらゆる種類の対象に，一般的に関係づけられることができる。けれども両者は，われわれ自身に関係づけられるとき，すなわち，われわれの尊重し軽視するものがわれわれ自身の価値であるとき，特に注目に値（し）……，つねよりも自己を重んじ，または軽んじている人々の，顔つきや身ぶりや歩きぶりまでも，一般に彼らの行動すべてを，変える」(7)〔（　）内は引用者による〕ほどのものなのである。

では，いかなる理由によって人は自己を尊重すればよいのであろうか。この問に対するデカルト氏の回答は，「みずからを尊重する正しい理由を与えるものとしては，ただ一つのものしか私には見あたらない。すなわち，われわれの自由意志の使用であり，われわれがみずからの意志作用に対してもつ支配である」(8) というものであった。「それゆえ私の考えでは，人間をして正当に自己を重んじうる極点にまで自己を重んぜしめるところの真の『高邁』（けだかさ）とは，一方では，自己が真に所有するといえるものとしては，自分のもろもろの意志作用の自由な使用しかなく，自己がほめられとがめられるべき理由としては，意志をよく用いるか悪(あ)し

く用いるかということしかない，と知ること」[9]なのである。さらに言えば，人間としてのけだかさを有した高邁な人というのは，そのことを知った上で，「他方，意志をよく用いようとする確固不変の決意を自己自身のうちに感ずること，すなわち，みずから最善と判断するすべてを企て実現しようとする意志を，どんな場合にも捨てまいとするところの，いいかえれば，完全に徳に従おうとするところの，確固不変の決意を自己自身のうちに感」[10]じている人なのである。

では，デカルト氏のいう高邁な人とは，対人関係や精神・感情生活の点でどのような性格を有している人なのであろうか。この問に対するデカルト氏の議論は，現代の日本社会における人々のその点での状況を分析する上で有益な視点を提供してくれると思われるので，煩をいとわず氏の議論のすべてを，ここで，引用しておきたい。デカルト氏は，高邁な人は自己を重んじるからといって，他方で，他者を決して軽視する，馬鹿にするというようなことはない人であることを強調している。氏いわく，自由意志をもつ存在であるがゆえに，自分自身を重んじるという，「自分自身についてこういう認識とこういう感情とをもつ（高邁な）人々は，他の人もまたおのおのそういう自己認識と自己感情とをもちうることをたやすく確信する。なぜなら，このことにおいては，誰も他人に依存するところはないのだからである。それゆえ，そういう人々は，だれをも軽視しない。そして，他の人がその弱点を暴露するようなあやまちをおかすのは，善（よ）き意志の欠如によるよりはむしろ，認識の欠如によると考えることに傾く。また，そういう人々は，みずからよりも多くの財産や名誉をもつ人々に対し，さらには自分よりも多くの知力，知識，美しさをもつ人々，また一般に他のなんらかの完全性において自分よりもすぐれている人々に対してさえも，自分がひどく劣っているとは考えないが，同時にまた，自分よりも劣っている人々に対して，みずからをひどく高く評価することもないのである。なぜならば，これらすべての事がらは，彼らにとっては，善き意志に比すれば，まことにとるにたらぬ事がらだと思われるからである。善き意志こそ，彼らが自己を重んずる唯一の理由であり，かつ他人の一人一人にもまたあり，あるいは少なくともありうる，と彼らの考えるところのものなのである」[11]〔（　）内は引用者による〕と。

さらにデカルト氏はつづけて強調する，「このような意味で，高邁な人々はそのもちまえからいって，偉大なことをしようという心組みでいるが，しかし，自分にできると感じないことは企てようとはしない。そして彼らは，他の人人（ママ）に善いことをし，そのために自分自身の利害を軽視する，ということを最も偉大であると考えるから，彼らはだれに対しても，申し分なく礼儀正しく愛想よく，親切である。そのうえ，彼らは自分の情念を完全に支配している。特に，彼らは自分の力で獲得しえないもので，自分が大いに望むだけの値うちのあるものはない，と考えるから，『欲望』や『執心』や『羨（うらや）み』に動かされず，また他の人間すべて重んじているから，人間に対する『憎み』に動かされず，さらに自分の徳に対する信頼が彼らを安心させているので，『恐れ』に動かされず，最後に，他人に依存するすべてのものをただ軽くしか見ず，

敵の優越性によって自分が傷つけられると認めるほど，敵に優越性をゆるすことはけっしてないのであるから，彼らは『怒り』にも動かされないのである」(12)と。

社会の構成メンバーすべての人々が，かかる高邁な人たちであるならば，その社会は，例え人々の間にさまざまな意味での差異が存在していたとしても，自由で，（デカルト氏の対等意識・感情と言う意味で）平等な，そして博愛にみちた社会となるのかもしれない。しかし，それは，現実にはかなり難しいことであろう。なぜならば，私たち人間は，これまた任意のさまざまな「ものさし」によって，人々の間にある差異に応じて，尊重したり，軽視したりする意識や感情を引き起こす性向があるからである。そうした性向が大きく現れるとき，人は，傲慢（デカルト氏のことばでは高慢）となる。そして，それは，デカルト氏によれば，不合理で，ばかげた感情なのである。氏いわく，「何ごとであれ，そのほかのことのためにみずからを重しとする人々はすべて，真の高邁の心をもたず，高慢の心をもつだけである。高慢はつねにきわめて悪い。もっとも，人がみずから重んずる理由が，より不当であれば，高慢もそれだけよけいに悪いということになるが。そして，すべてのうち最も不当な高慢は，なんの理由もないのに高慢であること，すなわち，自分が当然重んぜられてしかるべきなんらかの美点が自分にはあると考えるのでなく，ただ美点などというものをまったく無視することによって高慢であること，すなわち，名誉は人から横領すべき何ものかであって，最も多くの名誉を自分にとりこむ者が事実それを多くもつのだ，と考えることである」(13)と。

では，こうした悪徳はどうして生み出されるというのであろうか。同じくデカルト氏によれば，「この悪徳は，きわめて不合理なばかげたものであるから，もしだれも不当な賞賛を受けることがないのならば，こういう悪徳に耽(ふけ)る人間があるなどとは私は信じないであろう。けれども事実，阿諛(あゆ)はいたるところにいくらでもあり，どのように欠陥のある人間でも，たびたび，ほめられるに値しないことゆえに人に重んぜられたり，それどころか，とがめられてしかるべきことのために，人に重んぜられたりする経験をもつ。このことが，無知な者や，愚かな者に，こういう種類の高慢に陥る機会を与えるのである」(14)。

さらに，そうした高慢な感情は，自己および他の人々の心の中に，恨みや憎しみ，羨みや執心，そして怒りの感情を引き起こし，人間関係や社会秩序に悪い影響を及ぼすことになると，デカルト氏は見ていた。氏自身のことばで言えば，「みずから重んずる理由がどんなものであろうと，もしそれが，みずからの自由意志をいつも善(よ)く用いようとする，自己のうちに感ぜられる意志―そこから高邁の心が生ずる……―よりほかのものであるならば，そういう理由の生むものはつねに，大いにとがめらるべき高慢であって，まったく反対の効果をもつところの真の高邁とはきわめて異なったものである。なぜならば，知力とか美とか冨とか名誉など，他のすべての善は，それをもつ人の数か少なければ少ないほどよけいに重んぜられるのをつねとし，しかもそれらの善は大部分，多くの人に伝えうつすことができぬような性質のものであるから，その結果，そういうものによって高慢に陥った者たちは，他のすべての人をさげすむことに熱

心であり，かつみずからの情念のとりこになっていて，精神をたえず『憎み』や『羨み』や『執心』や『怒り』によってかきたてられている」[15]のであると。

高慢な人をこのように見るデカルト氏は，高慢な人は一見すると自己に自信と誇りを有しているように見えるけれど，一方では，卑屈な心情の持ち主でもあるのであった。氏によれば，「『卑屈（いやしさ）』，いいかえれば『悪しき謙遜』は，主として次のことにある。すなわち，自分が弱く，または不決断であると感じ，自分の自由意志の全き使用の能力をもたぬかのように，のちに後悔するぞとはっきりわかっている事がらを，なさずにはおれないということ。さらにまた，自分だけでは生きてゆけず，他人によってはじめて獲得しうる多くのものを，なしですますことができぬ，と考えること」[16]なのである。それゆえ，この卑屈な心情は，一見すると，高慢な心情と正反対な心情と思われがちだが，デカルト氏によればそうではなく，高慢な心情と親和性をもつ，むしろ高邁な心情と正反対の心情なのである。氏いわく，「『卑屈（いやしさ）』は高邁（けだかさ）の正反対である。また，最も高邁な者が，最も控えめで最も謙遜であるのと同様に，しばしば最も卑屈な者が，最も傲慢で尊大である。しかし，強い高邁な精神をもつ者が，自分の身のうえに起こる繁栄や不運のゆえに，気持を変えることはないのにひきかえ，弱く卑しい者は偶然の運によってのみ導かれ，不運が彼らをへりくだらせると同じく，繁栄は彼らを高ぶらせる。のみならず彼らは，自分に何かの利益を与えてくれそうな人，または自分が何かの悪をこうむらせられるかもしれぬ人の前では，恥ずべき卑下のふるまいをし，同時に自分がなんの利も期待できず，なんの害を受けるおそれもないような人に対しては，無礼な高ぶった態度をとることがしばしばある」[17]ものなのであると。

この高慢な人についての議論は，時代も文化もかなり違っている現代日本社会の社会的精神風景を見事に言い当てている，または描写していると言えるのではなかろうか。高慢（傲慢）と卑屈の心情が人々の精神生活を席巻し，さらにそれらの心情の反面の心情である恨み（ルサンチマン）―高慢な心情によってさげすまれた人々の感じる感情―を巻き起こし，それに苛まれているような社会とは，何といやらしい社会であることか。そうした社会では，気の弱い人たちは，非常に生きにくさを感じるのではないだろうか。さらに，そのような社会では，人々の間に，摩擦・軋轢，対立・紛争，そして犯罪が，絶え間なく起こり，ときには，社会秩序の不安定化，または解体を招きかねない状況が生じるかもしれないであろう。人間以下の存在とされている動物たちの中にも，とくに群れや社会を形成して生活している動物たちの中には，そうした群れまたは社会内での摩擦・軋轢を避け，平和的な秩序を維持するための心情装置を有していると言われている。オランダ生まれの動物学者フランス・ドゥ・ヴァール氏によれば，サルから人間に進化しつつあった時代の人間社会にも，獲物をとることにたけているがゆえに仲間たちの間で抜きんでた活躍をする個人が，あまりいばりすぎて平等な共同生活にさざなみを起こすことがないように，いばるという感情を冷却する社会的習慣が存在していたという[18]。

また，人類学・霊長類学専攻の山極寿一氏も，「現代は心の時代と言われている。心を病み，

社会に適応できずに悩んでいる人々が年々増えている」(19)のはどうしてだろうかと問い，その回答として次のような議論を行っていた。氏いわく，「人間の社会性は，対等性を好み，他者に同調していこうという共同性と，二つの親しさ（親子や兄弟姉妹の親しさと性的な親しさ）を使い分けようという傾向を基礎にもっている。これが原始の心であり，言葉ではなく五感を通じて感知され，伝達されていくことに特徴づけられる。しかも，この行動特性は生まれつき備わっているのではなく，生後に体験を重ねて習得していかねば身につかない。人間の好みも生後の経験によって大きな修正を受ける。育った文化や環境によって，好む色，形，音，匂いや味が変わってくる。森羅万象に善悪ではなく美醜を発見する心は，五感と社会，環境との相互作用によって造り上げられるのである」(20)〔（　）内は引用者による〕。「現代の心の病は，文化や宗教が言葉で人間の社会性を支えられなくなったことに原因があると私は思う。個人の好みや美醜の感覚が現実に合わず，他者との間にあつれきを起こす。それは人間本来の社会性を身体で習得できなかったり，原始の心から生まれる衝動をうまく表現できなかったりするためではないだろうか」(21)と。

山極氏の言う「人間の社会性を支えられなくなった」現代社会の文化と宗教，そして社会環境とは何であろうか。それは，著者には，利益追求至上主義，競争至上主義，そして敗者の自己責任至上主義という，経済のグローバル化の下で世界中を席巻している現代のマネーゲーム的市場経済万能主義という文化と宗教であり，そこから産出されてくる傲慢とルサンチマンという感情コミュニケーションであるように思われる。というのも，一般的に言っても，すでにヘーゲル氏の議論に依拠して言及してきたことであるが，市場経済社会においては，諸個人間の属性上のもろもろの差異が経済生活上の決定的な格差を生み出すと共に，その経済生活上の格差が，今度は，諸個人間の属性上のもろもろの差異，とくにそれらのより一層の拡大に影響するという性格を有しているからである。しかも，自他の認知様式の点でも，市場経済社会のそれは，諸個人間の属性上のもろもろの差異や格差を対象として，比較し，競争し，優劣の関係性として認知するという性格が強いという特徴をもっているからである。デカルト氏によれば単なる個性上の違いが，優劣上の違いとして認知されるという性格が強いのが，市場経済社会における諸個人間における自他の認知様式の特徴なのである。マネーゲーム的経済のグローバル化が進む現代の市場経済社会は，それらの諸性格，諸特徴がより強まっているといっても過言ではないであろう。

人間は，そうした認知様式に敏感に反応する心性をもっていると議論していたのは，ヒューム氏であった。ヒューム氏は言う，「一たい我々は明かに，自分自身の状態や境遇を省察して，それらの状態や境遇が幸運に見えるか不仕合わせに見えるか，その程度の大小に応じて，〔すなわち具体的に言えば〕自己が所持すると考える財冨や権力や功績や令名の程度に応じて，大小さまざまな満足又は不快を感得するに違いない。ところで又，我々は事物をその固有の価値に基いて判定することが殆どなく，他の事物との比較に基いて事物を思念する。それゆえ我々

は，他人のうちに観察される幸福又は不幸の分量の大小に応じて我々自身を評価するに相違なく，従ってその結果の快苦も感じるに相違ない道理になる。〔言い換えれば，〕他人の不幸は我々に自己の幸福の〔事実〕以上に生気ある観念を与えるし，他人の幸福は我々の不幸の同様な観念を与える。従って，前者は歓喜を産むし，後者は不快を産む」(22)のであると。同じくヒューム氏によれば，かかる心性の最大の問題は，引用文の中にもあるように，ものごとの本質や本当の価値を認識できず，しばしば，見逃してしまうことを招いてしまうことであった。氏は言う，こうした心性の結果，「我々は事物をその真実の固有な値打ちから判定するより比較から判定する方が多く，〔他物との〕対比によって価値を陞めることができないときは，本質的に良いものさえ，ともすると看過する」(23)ものなのであると。

以上のような心性を有しているのであるから，一般的にいっても，人間は，デカルト氏のいう意味での高邁な人になることはかなり難しいと言わなければならないであろう。ましてや，市場経済社会のように，自己の利益の極大化をめぐって自己の関心の外にある他者と競争し合っている諸個人間においては，なおさら，高邁な人になることは困難なように思われる。自己が所持する何らかのものを他者のそれと比較し，自己の所持するものについての優劣の感情をもつとともに，それを自他の関係の認知にも適応することで，人々は，容易に，デカルト氏のいう悪徳の感情，すなわち，傲慢か，卑屈かの感情をもってしまうものなのである。競争し，比較するものは無限にある（ただ，社会によってどのようなものをより重視するかということがあるのであるが）。ヒューム氏によれば，これは，自負と自卑という感情ということになろう。ヒューム氏いわく，「明かに自負と自卑とは端的に反対であるにもかかわらず，その『対象』は同じである。この対象とはすなわち自我である」(24)。しかし，「自我は，（自負と自卑という）情緒の『原因』であることは不可能である。換言すれば，自我だけで情緒を喚起するに十分であることはできないのである」(25)〔（　）内は引用者による〕。

「それゆえ，自負と自卑の情緒の原因と対象とは区別しなければならない。換言すれば，情緒を喚起する観念と，情緒が喚起されたとき視線を差向ける観念と，この二つは区別しなければならないのである。けだし自負と自卑とは，ひとたび起れば直ちに我々の注意を我々自身へ向けて，これを究極終局の対象と眺める。が，情緒を起すには，更にそれ以上の何物かが必須である。すなわち，一方の情緒に特異で，二つの情緒を全く同じ程度には産まないようなものが，必須である。およそ〔情緒の生起に当って，〕心に現れる第一の観念は，原因すなわち産出原理の観念である。この観念が，それと〔因果的に〕結合する情緒を喚起する。そして情緒は，喚起されたとき我々の視線をいま一つの観念へ向ける。その観念が自我の観念である。然らばここに，情緒は二つの観念の間に置かれる。その一つは，情緒を産む観念であるし，他は，情緒によって生み出される観念である。それゆえ，最初の観念は情緒の原因を表し，第二の観念は情緒の対象を表すのである」(26)。

この引用文からもわかるように，ヒューム氏は，自負と自卑の感情の原因とそれらの感情が

向けられる対象とを区別するのであるが，では，氏はそれらの原因をどのように見ていたのであろうか。これを，ヒューム氏自身のことばで確認しておくならば，自負と自卑の感情の「原因の最も分明且つ顕著な特性は，原因の置かれ得る主体が夥しく多様なことである，と言うことができる。けだし，心の価値ある性質はすべて，想像の性質にせよ，判断のそれにせよ，記憶のであれ，性向のであれ，例えば機智，良識，学識，勇気，正義，廉直など，それらすべては自負の原因であるし，その対立性質は自卑の原因である。いや，これらの情緒は心に局限されない。身体にも等しく視線を及ぼすのである。例えば人間は，自己の美さや強さや敏捷や美貌や舞踏・騎乗・剣術の熟練や手仕事ないし手工業の熟練を自負できる。が，これで全部ではない。情緒は更に遠くを眺めて，我々と些かでも連合し関係する対象を包括する。我々の国土・家族・子女・縁戚・財冨・家屋・庭園・乗馬・畜犬・衣服，それらはいずれも自負か自卑の原因となることができる」(27)のである。

人が，自負や自卑，または傲慢や卑屈の感情をもつようになる諸原因が如何に多いかがこのヒューム氏の引用文からもわかるであろう。しかも，後で見ることになるが，人間関係における支配・従属関係，または権力関係の作用が，さらに重なって作用するとき，人間は，とくに傲慢，または卑屈の感情の影響を強く受けるものとなろう。その検討は，それ自体がここでの課題ではないので，別稿を用意しなければならないが，現代の若者バッシングの論調に，現代の子供たちや若者たちが，極めて自己愛を肥大化させ，尊大になっているという議論があるが，その議論について一言だけ言及しておきたい。それは，傲慢さや尊大さという感情は，必ずしも，ヒューム氏の言う自負心から生じるものだけではないということである。すでに言及したデカルト氏も言っているように，最大の傲慢さや尊大さは，実は最大の卑屈さの裏返しの感情でもあるのである。このことに，ここで，とくに言及するのは，現代日本の子供たちや若者たちの心情に関する各種の調査によって，彼らの多くの者たちは，健康な意味での自負心(28)をもち，それゆえ，自己に誇りと自信，固い自己信頼をもっているというよりは，全く反対の心情に苛まれているという報告がされているからである。そうした状況と，例えばキレるという子供たち，若者たちの，一見すると，大人たちからは尊大さからでてくると思われがちな，諸行動や行為とがどのように関係しているのかを解明することは，感情コミュニケーションの社会学にとっても重要な研究課題であろう。

ここまでヒューム氏の議論に依拠して見てきたように，人間には，自己の価値，または自他の関係認識において，比較し，優劣関係の中で認識するという心性があり，そこから自負や自卑の感情が生じるが，それが容易にデカルト氏のいう傲慢とルサンチマンの感情コミュニケーションに転化しかねない可能性を秘めているのである。とくに，自由競争を至上の社会形成原理とし，さまざまな意味での格差を構造的に産出する市場経済社会においては，さまざまな原因によって生じる自負と自卑の感情が，より容易に，かつより高い頻度で傲慢とルサンチマンの感情コミュニケーションへと転化するであろう。しかし，アダム・スミス氏によれば，そう

した市場経済社会であっても，人は，一般的には傲慢にはならないものであると論じていた。なぜならば，デカルト氏も指摘していたように，傲慢な感情には，反作用的に他者の反感を引き起こすことになるが，そのことを知って人は，傲慢になろうとする心性を抑止しようとするとスミス氏は見ていたからである。同じくスミス氏によれば，自他の関係認識において，人は，これも一般的には，人間とはなによりも自己を中心に，自分こそが重要で大切であるというように認識する性向を有している存在であることを知り，同じ性向を有している他者の目で自己を見るという認知方法を採用することによって，そうした性向から自由になるという心的メカニズムを作動させることによって，愛情や仁愛のような社会的性質を有している感情の力を借りるまでもなく，傲慢であることを避けるものなのである。

スミス氏自身のことばで言えば，以下のようになる。「ことわざによれば各人は，かれ自身にとっての全世界であるかもしれないにしても，かれ以外の人類にとっては，かれはそのきわめてとるにたりない一部分なのである。かれ自身の幸福は，かれにとっては，かれ以外の全世界のそれよりも，重要であるかもしれないにしても，他の各人にとっては，どんな他人のそれよりも，重大だということはない。したがって，各個人が自分の胸のなかでは自然にかれ自身を全人類よりも選好するというのは，ほんとうかもしれないとはいえ，それでもかれは，人類をまともに見て，自分はこの原理に従って行動するのだと，公言する勇気はない。かれは，かれがこの選好において，けっしてかれについていくことができないし，それがかれにとってどんなに自然であっても，かれにとってはつねに，過度で法外に見えるにちがいない，ということを感じている。他の人びとが自分をこう見るであろうとかれが意識している見方で，かれが自分を見るならば，自分がかれにとっては，いかなる点でも他のだれにもまさってない，大衆のなかのひとりであるにすぎないことが，わかるのである。もしかれが，中立的な観察者がかれの行動の諸原理にはいりこめるように，行為しようとするならば，それはあらゆるものごとのなかで，そうしたいという最大の欲望をかれがもっていることなのだが，このばあいにかれは，他のすべてのばあいと同様に，かれの自愛心の高慢をくじかなければならないし，それを，他の人びとがついていけるようなものにまで，引き下げなければならない」(29)のであると。

「このようにして，自愛心のもっとも強い衝動にさえ対抗できるのは，人間愛というやさしい力ではなく，自然……が人間の心に点じておいた，慈愛の弱い火花ではない……。そのようなばあいにはたらくのは，もっと強い力であり，もっと強制的な動機である。それは，理性，原理，良心，胸中の住人，内部の人，われわれの行為の裁判官にして裁決者である。われわれが他の人びとの幸福に作用をあたえるように行為しようとするときはいつでも，われわれの諸情念のうちにもっとも生意気なものをも，驚かせる声で，われわれにつぎのことをよびかけるのは，かれらなのである。すなわち，われわれは，大衆のなかのひとりにすぎず，どんな点においても，そのうちどんな他人にもまさらないのだということ，そして，われわれがそのように無恥に，そのように盲目的に，われわれ自身を他の人びとに優先させるならば，われわれは

憤慨と忌避とのろいの，正当な対象となるのだということである」(30)。

以上のように，スミス氏によれば，人間はすぐれて利己的で，自愛心に富んだ存在であるにしても，自他の関係認知において，決して傲慢にはならない心的メカニズムを，自然が与えてくれているのであった。しかし，その心的メカニズムが作動する決定的条件が存在していた。それは，スミス氏の言う，「理性」，「原理」，「良心」，「胸中の住人」，「内部の人」，そして自己の行為の是非の最終的な「裁判官にして裁決者」の存在，すなわち，すでに検討してきたスミス氏の感情コミュニケーションの理論から言えば，自我がしっかりと確立しているということであった。それも後の探究の課題であり，ここでは言及することができないのであるが，それは，私たちの精神生活における自立と自律の確立の問題である。すなわち，競争的条件の中での自他の関係認知において，比較し，比較した対象に関しての優劣を認知し，そのことについてのヒューム氏の言う意味での自負心や自卑心をもつということはあっても，スミス氏の言う心的メカニズムが作動することで，ある事柄についての優劣の認知が人格上の優劣の認識に転化し，ある事柄についての自負心と自卑心が，デカルト氏の言う傲慢と卑屈の感情に転化するということが起こらなくなるためには，同じ社会の中で生活している人々の精神的な自立と自律が確立されていることが不可避的な条件なのである。しかし，これは私見であるが，共感にもとづく感情コミュニケーションが後退し，それに替わって，損得勘定，相互孤立と孤独，疑心暗鬼,そして傲慢とルサンチマンというような非共感的な感情コミュニケーションが優越し，ますます強化されている，マネーゲーム的経済のグローバル化の現代社会においては，その精神的自立と自律を確立することが，非常に難しいことになっていると思われるのである。人々の精神生活における自立と自律という条件が希薄な社会の中では，ある事柄についての自負心や自卑心は，いとも簡単に，傲慢と卑屈の感情に転化するものなのである。

傲慢とルサンチマンの感情コミュニケーションの検討の最後に，支配・従属関係という人間関係・社会関係の下での感情コミュニケーションとはどのようなものであるかということについて見ておきたい。そうした条件での感情コミュニケーションは，支配・従属関係のさまざまな存在諸形態に応じて，単なる敵対的という感情をはるかに超えたさまざまな様相と複雑を有した諸感情形態を引き起こすことが考えられると思われるが，ここでは，そこまで立ち入って検討することはできない。ただ，一般的，簡潔に論じることができるだけである。

マックス・ウェーバー氏によれば，人間と人間の関係は，つまるところ，意志と意志との関係であり，支配とは，自己の意志を，他者の対抗的な意志に抗して，他者に押しつけることのできる，すなわち，自己の意志によって他者の行動・行為をコントロールすることのできる可能性のことであるが,そうした人間関係の下での人々の感情コミュニケーションと感情生活は,どのようなものになるのであろうか。とくに，支配され，自己の意志を抑圧し，殺しながら，自己の意志に反する意志に従属しなければならない被支配者の側の人々の感情生活とはどのようになるものなのであろうか。それは，きっと，余りにも多様で，複雑なものであると考えら

れるので，軽々しくは，一般的なことは言えないようなものなのであろう。それゆえ，その問に対する満足のいく回答をするには別稿を用意しなければならないと思われる。ここでは，傲慢とルサンチマンという感情コミュニケーションを検討しているという文脈との関連で，支配する側の人の主観的心情がどうあれ，他者を支配するという諸行動・行為それ自体が傲慢な行動・行為と認知されるのであり，そうした場合の支配される側の感情生活の主要要素の諸感情の一つとして，「怒りと恨み」という感情は外すことができない(31)ということを言うに留めざるをえない。マルクス氏は，氏の著作『資本論』において奴隷制度について論じる中で，人間としてはおろか動物や労働諸道具と同じかそれ以下の扱いしか受けられない奴隷たちの怒りと，それをそうした扱いをしている奴隷主たちにぶつけ，そうした扱いから逃れえないときの諸心情および諸行動・行為について，次のように叙述していた。少々長くなるが，これも，後に現代日本社会における私たちの精神生活・感情生活を分析する上で有用であると思われるがゆえに，全文引用しておきたい。

マルクス氏いわく，そうした扱いは，「奴隷制にもとづく生産を高価なものにする事情の一つである。労働者は，ここでは，古典古代人の適切な表現に従えば，〝ものを言う道具〟としてのみ，〝なかばものを言う道具〟としての動物および〝ものを言わない道具〟としての死んだ労働道具から区別される。しかし，労働者自身は，動物と労働道具に，自分はそれらと同類なのではなく，人間なのだということを思い知らせる。彼は，それらを虐待し，損壊しながら〝喜ぶ（コン・アモール）〟ことによって，それらと自分との区別についての自尊心を得るのである。それゆえ，この生産様式においては，もっとも粗雑でもっとも鈍重な，だがまさにそのどうしようもない無骨さのゆえに壊れにくい労働用具のみを使用することが，経済原則として通用する。それゆえ，南北戦争の勃発まではメキシコ湾沿岸の奴隷制諸州において，古代中国的構造の犂（すき）が見られた。この犂はイノシシやモグラのように土地を掘りはするが，畦（うね）をつくったり土地をすき返したりはしないものであった。Ｊ.Ｅ.ケアンズ『奴隷力』，ロンドン，一八六二年，四六ページ以下，参照。オムステドは，彼の『沿岸奴隷制諸州〔の旅〕』〔ニューヨーク，一八五六年，四六―四七ページ〕において，とりわけ，次のように述べている―『私は，ここで，われわれのところでは，分別のある人間なら，自分が賃銀を支払っている労働者をそれでもって苦しめることはないであろうような諸道具を見せられた。それらの道具の非常な重さと無骨さは，私の見解では，われわれのところで普通用いられている道具を使うよりも，少なくとも一〇％は労働を困難にするに違いない。とはいえ，私が確信するところでは，それらの道具が奴隷によって不注意で粗野なやり方で使用されているように思われるので，もっと軽いかもっと不細工でない道具を奴隷にあてがっても，よい結果を得ることは不可能であろうし，またわれわれがいつもわが労働者たちにあてがってしかも相当な利得をあげているような道具は，ヴァージニアのトウモロコシ畑では―その土はわれわれのところの土よりも軽くて石が少ないにもかかわらず――一日ももたないであろう。それにまた，農場においてはなぜこれほど一般的に馬の代わり

にラバが用いられているのかという私の質問にたいして，第一の，そして明らかにもっとも決定的な理由としてあげられたことは，馬は黒人たちによってすぐにびっこにされたり，ぶたれてかたわにされたりするが，ラバは棍棒でぶたれたり，時には，一，二回餌をあてがわれなくても，辛抱して身体を傷めることもない。ラバは，放っておかれたり，働かされすぎたりしたときにも，かぜをひいたり，病気になったりはしない。しかし，私が書きものをしているこの部屋の窓のところまで行きさえすれば，ほとんどいつでも，北部の農業者ならばだれでも即座に家畜係を解雇するであろうような，家畜の取り扱いが見られるのである』」(32)と。

この引用文にある，奴隷が，奴隷主から同じ様な扱いを受けている「動物と労働用具に，自分はそれらと同類なのではなく，人間なのだということを思い知らせる」ためにとる，虐待や損壊の諸行動・行為は，なにも奴隷制社会にかぎった人間の諸行動・行為というわけではない。どのような時代のどのような社会においても，もし，ある社会の中のある個人が，他のメンバーから孤絶し，不名誉で，不当な扱いを受けていると感じ，怒りと恨みの感情をつのらせるというような場合，その個人が，何らの直接的な動機なしに，時には全く本人とは関係ない人たちに向け，引用文の奴隷のとった諸行動や行為と同じような諸行動や行為をとることは，普遍的に見られることであると，進化心理学者のスティーブン・ピンカー氏は述べている。時には，それらの行動や行為は，動機なき無差別殺人事件のようなものにまで発展する。スティーブン氏は，そうした凶悪事件を起こすような人を，アモク症候群に陥った人と呼んでいた。

氏によれば，「『アモク』はマレー語で，愛やお金や面目を失った孤独なインドネシア人たちがときに起こす錯乱した殺人騒ぎを指す」(33)ことばである。そして，同じくスティーブン氏によれば，「アモクになった人間はあきらかに正気を失って，周囲の状況が目に入らず，説得も脅しも届かないオートマトンとなる。しかし彼の凶悪な行動は，長い失意のあと，耐えがたい状況から自分を解放する手段として慎重に計画されたものである。アモクの状況はぞっとするほど認知的である。アモクを誘発するのは外的刺激でもなければ，脳腫瘍でも，脳内の化学物質のでたらめな大量流出でもなく，ある観念である。その観念はきわめて標準的であるため，一九六八年にある心理学者がパプアニューギニアで入院中のアモク七人に聞き取り調査をしてまとめたアモクの物の見方が，数十年の後の大量殺人犯（1996年３月13日，スコットランドのダンブレーの小学校で起こった銃による無差別殺人事件のトマス・ハミルトンという犯人）の思考にもそのままあてはまる。

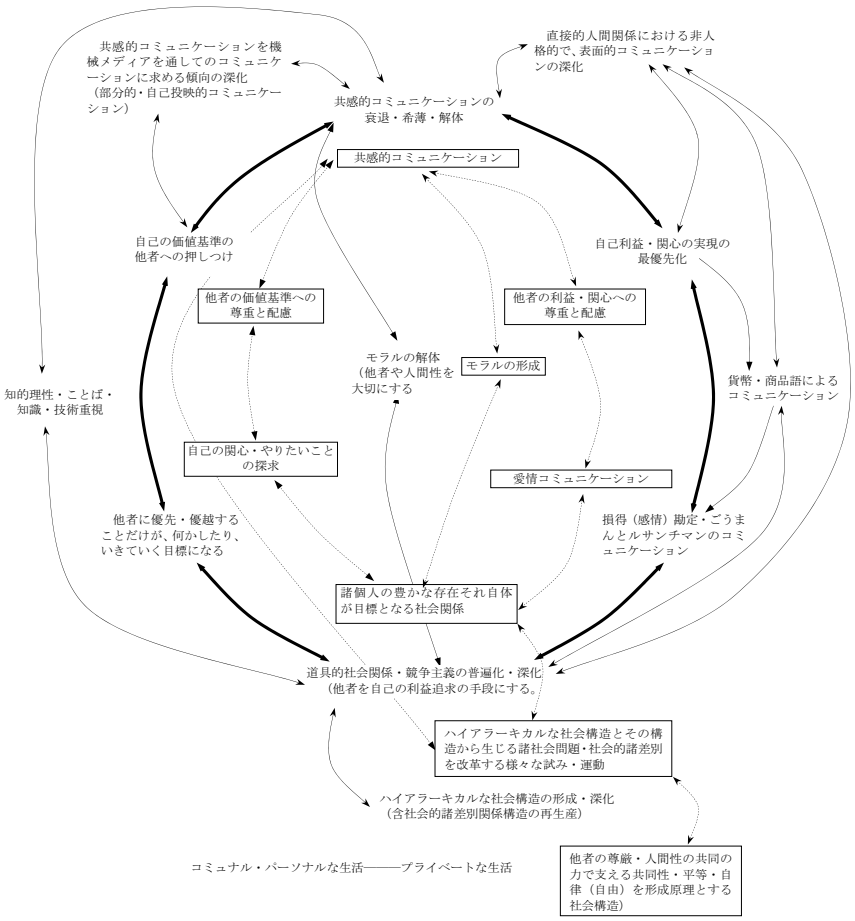
私は重要人物ではない。自分なりの自尊心をもっているだけだ。私の人生は耐えがたい侮辱でしかないものになってしまった。だからもう，なんの意味もない命のほかに失うものはないので，自分の命を人の命と交換する。交換は私のためにするのだから，一人を殺すだけでなく，大勢を殺す。そして同時に私が属している集団から見た私の名誉を回復する。その過程で死んでしまってもかまわない。

アモク・シンドロームは，人の感情という謎の極端な例である。一見したところでは変わっ

ているが，よく見ると普遍的なのがわかる。本質的に非合理的で，抽象的な思考と密にからみあい，独自の冷たい論理をもっている」[34]〔（　）内は引用者による〕のである。

現在の日本社会の中にも，他者から孤絶し，不面目感を増大させ，もはや生きる意味を失ってしまっていると感じている人は，決して少数者ではないように思われる。それは，そうした人たちの中から，いつなんどき，いかなる形で，どれくらい，引用文にあるようなアモク・シンドロームに陥る人が出てくるのかわからないという不安と危険に隣り合わせに，私たちは生活しているということを，意味しているのである。

ここまで，現代社会における社会形成原理，生活原理，そしてそれらと関係する感情コミュニケーションの主要な基本諸類型について検討を進めてきた。その最後に，ここまで検討してきた，それらの関連図を図－１として示しておくことにしたい。



→は関連する方向を示し、太の実線、実線、波線の順で現代社会内に占める影響の大きさを示している。

図－１　現代社会における社会関係原理・感情コミュニケーション諸類型・社会構造の関連図

註

（1）角川書店の『国語辞典』で個性を調べてみると，「個人または個体の性質。他とはちがっている特性。パーソナリティー」と記載されている。ただ，一口に，「個人または個体の他とはちがっている特性」と言っても，その着目する視点によって，実に多くの差異の種類をあげることができよう。例えば，それは，①肉体的，生理解剖学的違い，②心理学的意味での性格の違い（パーソナリティ），③肉体的・精神的素質・才能・能力などの違い，④感受性，興味・関心，好きなこと・ものなどの違い，⑤政治・経済・文化その他の社会的諸属性の違い等の種類に分けることができよう。連載から成る本稿の中で，個性と言うことで著者が重視しているのは，④における特性の違いである。

（2）ヘーゲル『歴史哲学（中）』岩崎武雄訳，中央公論社，1985年，50頁。

（3）ヘーゲル『法の哲学』岩崎武雄訳，中央公論社，1978年，462頁。

（4）同上，465頁。

（5）同上，469頁。

（6）デカルト『方法序説』野田又夫訳，中公文庫，1989年版，211頁。

（7）同上，212頁。

（8）同上。

（9）同上，213頁。

(10) 同上。

(11) 同上，213～214頁。

(12) 同上，215頁。

(13) 同上，215～216頁。

(14) 同上，216頁。

(15) 同上，216～217頁。

(16) 同上，217頁。

(17) 同上，217～218頁。

(18) フランス・ドゥ・ヴァール『利己的なサル，他人を思いやるサル』西田利貞・藤田留美訳，1998年。

(19) 山極寿一「身体の世紀」(『世界思想2004春31号』，2004年所収)，39頁。

(20) 同上，43頁。

(21) 同上。

(22) ディヴィド・ヒューム『人性論（三）』大槻春彦訳，岩波文庫，1995年版，150～151頁。引用に際しては，旧漢字を新漢字にあらためている。

(23) 同上，34頁。

(24) 同上，14頁。

(25) 同上。

(26) 同上，15～16頁。

(27) 同上，16頁。

(28) ヒューム氏の「自負と自卑下」に関する議論によれば，自負心をもつことはけっして悪いことではなく，むしろ望ましいことである場合もあると言う。氏自身のことばによれば，「私の理解する自負とは，我々が自己の徳なり美なり財富なり権力なりを視て満足するとき心に起る快適な印象のことである。そして自卑とは，これと対立する印象なのである。そうすれば明かに，前の印象は常に必ずしも悪徳ではないし，後の印象は徳でない」（同上，42～43頁）のであると。

(29) アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳，筑摩書房，1973年，130～131頁。

(30) 同上，201頁。

(31) バーバレット氏は，感情社会学の立場から，階級関係の社会学的分析を行う際のキーワードとして，憤慨（resentment）をあげている。J. M. Barbalet, Emotion, Social Theory and Social Structure—A Macrosociological Approach—, Cambridge, 2001.

(32) カール・マルクス『資本論２』新日本出版社，1991年，335～337頁。

(33) スティーブン・ピンカー『心の仕組み（中）』椋田直子・山下篤子訳，ＮＨＫブックス，2003年，228頁。

(34) 同上，228～229頁。

The Sociology of Emotional Communication and the Modern Societies (4)

UCHIDA, Tsukasa

One of features of our life style in the modern societies is that we live in the way of life in which reason is dissociated from the emotional life and is contrasted with it. And we have also given a big importance on reason, but on the other hand we have neglected an important significance of the emotional life.

In modern market societies in which we have lived, we have had to adapt ourselves to the rationalized social life in which the principles of modern rational and economized social life, like maximal profit by minimal cost, optimization, efficiency, and possibility of calculation, have been supreme ones. In such economized way of social life in the market societies, we have to treat the world outside us and ourselves as a means and instrumentally with the emotion (account) of profit and loss to attain ourselves ends, whether we wanted to or not.

In such social life, we have seen only intelligence as reason, but in the other hand, we have made emotions belong to the second and subordinate place, by seeing them as disturbing our rational activities and being irrational things. However, such very social life style seems to have suppressed our emotional life and have raised a lot of emotional problems that we don't know how to solve, not only in our individual minds but also in our social world.

I am going to analysis social conditions and our social life style which have raised such emotional problems, from the point of view of emotional communication in a series of articles. In this article, I intend to treat the emotional communication based on arrogance and ressentiment.

Keywords: emotional communication, sympathy, the emotion (or account) of profit and loss, suspicious communication, arrogance and ressentiment, love

（うちだ　つかさ　本学人文学部教授　生活構造論専攻）